

# 光星・山田怜卓選手 昨夏、チームメート急逝



ブルペンから試合を見守る山田選手  
26日、兵庫県西宮市の阪神甲子園球場



「あいつの分まで」と  
刺しゅうされたグラブ

# あいつの分も投げる

「あいつの分まで」。第91回選抜高校野球に出場している八戸学院光星の投手・山田怜卓選手(3年)は京都府出身。昨秋、購入した練習用グラブに、そう刺しゅうした。昨夏の甲子園のさなかに急逝した親友で、チームメートの吉川智行さん(当時2年)は東京都出身。胸に刻むためだ。26日の初戦、山田選手は甲子園のベンチにそのグラブを置いた。登板機会がないまま初戦敗退となったが、「次は背番号1をうけてここに戻ってくる」と、亡き友に誓いを立てた。(高松拓輝)【本記1面】

## 「夏は背番号1を」グラブに誓い

2人は寮の部屋が近く、入部してすぐに意気投合。夜間、キャッチボールなど一緒に自主練習する仲になった。「背番号1をつけて甲子園のマウンドに立っているのは俺だから」「いや、俺だ」。2人はそんなやりとりをしながらともに甲子園を夢に見た。しかし2017年秋、吉川さんの脳に腫瘍が見つかり、10月中旬に一緒に球を投げ合ったのが、最後のキャッチボールとなった。長く入院生活を送った吉川さん。18年夏、光星が甲子園初戦を迎える前日、山田選手は親友の訃報を知り、「頭が真っ白になった」。秋になっても練習に身が入らないほど、失意に暮れた。しかし時が経つにつれ、「落ち込んでいても天国の吉川はうれしくない」と、自らを奮い立たせた。新たに買った練習用グラブの人

目に付かない内側に、親友への思いを刺しゅうして刻んだ。秋の東北大会、山田選手を異変が襲った。ブルペンで肩を温めようと球を投げる「体に電気が走った」。ろつ骨を疲労骨折し、寝返りすると痛くて飛び起きる日々と格闘しながらリハビリに励んだ。「あいつの分まで甲子園に立つために」と体にむち打った。本格復帰は今年1月。地道な体づくりが効果を上げ、球速が6キップアップ。チーム内で最速の143キップをマークし、主力投手陣の一翼を担うようになった。

センバツ初戦・広陵(広島)戦。「吉川の思いを背負っていることを思い出せるように」、グラブをベンチに持ち込んだ。試合は息詰まる投手戦。10番を背負った山田選手は初回からブルペンで準備したが、最後まで甲子園のマウンドに立つことはなかった。初戦で敗れ「あいつの分まで」との思いを果たせなかつた。「もつと力を付けて、夏は背番号1をつけて戻って来る」。親友と交わした約束は、最後の夏に果たす。

留守部隊も一喜一憂。八戸市の八戸学院光星高校では26日、バスケットボール部や陸上部などの生徒ら、留守部隊の約130人がオープンスペースの大型スクリーンで試合を観戦した。敗れたものの、生徒たちは最後まで闘志あふれるプレーをみせたナインの健闘をたたえ、夏の甲子園での雪辱に期待を寄せた。試合は一回から、ほぼ毎

回出場を許す苦しい展開に。二回裏、無死満塁のピンチを無失点で切り抜けると、生徒たちはメガホンをたたきながら大きな歓声を上げた。以降も好守で会場を沸かせたが、攻撃ではあつと一本が出ず無得点が続いた。九回表2死、7番原瑞都選手が打ち取られると、生徒は「あぁー」「惜しかった」と声を上げ、ナインと悔しさを分かち合った。陸上部の熊谷和真さん(2年)は「負けてしまったが、いい試合だった。自分たちも努力して感動を与えような走りがしたい」、男子バスケットボール部マネージャーの中崎さくらさん(同)は「懸命な準備はとてもしっかりした。夏の甲子園はもっと上を目指してほしい」と語った。(大久保拓地)



ナインに声援を送る留守部隊。26日、八戸市